

キャラクター名
オルテンシア=ガブリエーリ

プレイヤー名

シンドローム	キュマイラ	ワークス	UGN	エージェントC	カヴァー	
	エグザイル					
オプション	モルフェウス	年齢	12	性別	女	
覚醒	死	衝動	解放	初期侵食率	36	%
出自	犯罪者の子 100	経験	転校 69	邂逅	借り 27	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	31
肉体	5	0	0			5	行動値	3
感覚	1	0	0			1	(非装備時)	3
精神	0	1	0			1	戦闘移動	8
社会	2	0	0			2	全力移動	16

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	1		交渉		
回避			知覚			意志	3		調達	1	
運転:			芸術:			知識:	2		情報: UGN	2	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
インフィニティウェポン	白兵	12r	8	Lv+7		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
パワーソース:ピサイド	
情報収集チーム	
インクリボン	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
器物使い	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 6 残り財産P:

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
スピードクリエイト	1	2	イニシアチブ	至近	自身	自動		
効果:	イニシアチブでマイナーの武器作成エフェクトを使用できる。他のエフェクトと組み合わせ不可							
千変の刃	3	5	マイナー	至近	自身	自動	120,解放	
効果:	シーン中、白兵攻撃の対象を範囲(選択)に変更し、ダメージ+[Lv*3]							
真名の主	2	5	マイナー	至近	自身	自動	120,解放	
効果:	エフェクトで作成した武器一つのダメージを+[Lv+1]Dする シナリオ一回							
インフィニティウェポン	1	3	マイナー	至近	自身	自動		
効果:	ダメージ+[Lv+7]の白兵武器を作成し、装備する							
ペネトレイト	1	3	メジャー	武器	-	白兵/射撃		
効果:	装甲無視 判定ダイス-1個							
コンセントレイト:モルフェウス	2	2	メジャー	-	-	S		
効果:	C値-[Lv]							
復讐の刃	2	6	オート	至近	単体	自動		
効果:	リアクションを放棄して、リアクション不可の攻撃を行う							
フルパワーアタック	2	4	セットアップ	至近	自身	自動	80%	
効果:	ラウンド中ダメージ+[Lv*5]、行動値0に							
万能器具	★							
効果:								
無上厨師	★							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

【変異暴走:解放】:暴走中、行動値が0で固定される

【三行設定】
触れたらキレルロリメイド。武器に限らず、物の声を聴くことができるようだ
体から無尽蔵に刃物を生み出してしまいう例えではない全身凶器人間。収納しており、びっくりすると幾つ飛び出してしまう
両親はシチリアマフィアに惨殺され、自分も見せしめに家にあった刀剣で殺される。その際に宿っていたRBと共鳴し、覚醒した

【設定】
命が惜しければ彼女の背後に立つな。新入りが入ってきたら、そいつが赤毛でメイド服を常に着用している彼女に会う前に支部の誰も一度はそう忠告する。面白半分のからかいや虐めではない。オーヴァード故に死なないとはいえ、誰だって鋭い刃物で一突きに体を貫かれる痛みは味わいたくないだろう。

彼女はイタリアのとある上流階級の家に生まれた一人娘、お嬢様である。家は地元での商工会を取り仕切るような元締め立場であり古く古くから続く由緒ある御家柄。没落貴族のタイプではなく、それ故にオルテンシアも昔から大事に大事に育てられてきた。無論、周囲の人間もガブリエーリ家の怒りを買わないようにと、彼女を丁寧に扱う
結果、彼女は高慢で我儘なお嬢様となった。我慢ができず、世話を焼いてくれるメイドが気分を害したら当たり散らす。無論、それは両親があまりオルテンシアを顧みなかったため、気を引きたがった行動でもあるのだが……。残念ながら両親がそれに気付くことはなく、メイドもほとほと呆れて彼女の深層を慮ったりはしなかった。

「オルテンシア様、あんなんにも傲慢で大丈夫なのでしょうか」
メイドや執事が心配するのは理由がある。
オルテンシア家には家宝とも呼べるものがあった。それがリビングの目立つ位置に丁寧に展示された一本の剣である。大きさはオルテンシアの身長と凡そ同じ程度の、大ぶりの両手剣。かつてガブリエーリ家の先祖が戦功を挙げ、当時の王から直々に賜ったという逸話のあるもので、家長はこれを継承する決まりとなっていた